

はしがき

朝鮮半島は半世紀以上の長きにわたって南北（韓国と北朝鮮）に分断されてきた。朝鮮半島をめぐる情勢には、北朝鮮における経済破綻と金正恩政権の動向、韓国における経済と政治の不安定化という、両側面から混沌としている。長期的には、南北統一の方向に向かうであろうが、それまでの過程には不確定要素が多くある。

本書では、南北統一を展望するために、北朝鮮の政治・経済の現状評価と、韓国経済の評価を中心として、分析している。

本書の構成は、次のとおりとなっている。

- I 韓国経済の変調と北朝鮮の動向（樫原正澄・李英和）
- II 北朝鮮の市場経済の拡大と社会変化～北朝鮮内部映像から考える～（石丸次郎）
- III 韓国対外援助の変遷：レシピエントからドナーへ（小井川広志）
- IV 自由貿易体制下の韓国農業（樫原正澄）

本書の内容を要約しておこう。

「I 韓国経済の変調と北朝鮮の動向」（樫原正澄・李英和）において、まずは、韓国経済の発展過程と現状を紹介している。とりわけ、1997年アジア通貨危機以降の韓国経済社会の変化に着目している。韓国経済の現状分析として、①金融・企業改革、②貿易構造の変化と国際収支構造、③韓国のFTA戦略、④南北経済関係について検討している。その上で、北朝鮮における指導体制の変化について分析を加えており、金正恩体制における権力闘争を紹介している。

「II 北朝鮮の市場経済の拡大と社会変化～北朝鮮内部映像から考える～」(石丸次郎)においては、北朝鮮における計画経済の破綻によって、市場経済が進行する状況について、現地での調査・写真を踏まえて紹介している。

1994年7月の金日成急死による、北朝鮮社会の混乱と朝鮮史上最大最悪の大飢饉について、著者は1995年から2000年頃までを、「苦難の行軍」として紹介している。こうしたなかで、市場化の拡大が進行し、闇市場の横行、当局による市場の追認がなされ、北朝鮮における多様な市場経済が展開する状況について叙述している。そして、職場離脱と「組織生活」の形骸化を指摘しており、情

報統制下における市場化の進行によって風穴が開いていると述べている。しかしながら、こうした市場経済の拡大が、金正恩独裁体制の変化に結びつくかについては、北朝鮮内部の状況を注視する必要があると結んでいる。

「Ⅲ 韓国対外援助の変遷：レシピエントからドナーへ」（小井川広志）においては、韓国の対外援助の変遷を整理し、今後の東アジアにおける対外援助のあり方について検討している。韓国は、1996年にOECD（経済協力開発機構）に加盟し、2010年にはDAC（開発援助委員会）に加入し、かつての援助受入国（レシピエント）から、援助供与国（ドナー）の地位へと転換を図ったことが紹介されている。このことに関して、筆者は、「かつての援助国が経済発展に成功し、援助する側へと脱皮したケースは韓国が最初であり、途上国の経済発展と援助のあり方を理解する上で、重要な教訓を内包している」と指摘している。韓国が供与するODAの優位性と課題を整理して、東アジア発の対外援助モデルの構築を提案している。

「Ⅳ 自由貿易体制下の韓国農業」（檜原正澄）においては、貿易自由化における韓国農業のゆくえを分析している。まずは、韓国のFTA戦略を紹介し、韓国農業の変化を分析している。韓国経済の発展のなかで、韓国農業は国民経済における相対的地位を低下させてきた。同時に、国民への食料供給機能を低下させており、韓国農業が抱える国民的課題を指摘している。とりわけ、韓国農業は国際化のなかで激しい変動過程にあり、2010年現在で、韓国農業は厳しい局面に立たされていることを、経済指標で示している。

こうしたなかで、韓国農業のもう一つの道として、韓国全羅北道鎮安郡における村づくりの事例を紹介している。最後に、韓国農政の課題を整理している。

以上、本書の簡単な説明をしてきた。

朝鮮半島の情勢は日本にとっても重要な事項であり、北朝鮮ならびに韓国の動静を冷静に判断することが、東アジアの平和と繁栄に寄与することになると考えられる。本書が、そのための素材を提供できたとすれば、幸いである。

2016年3月

朝鮮半島における経済と政治研究班
主幹 檜原正澄